

# 文化財だより

## 第19号

もくじ

仏像六躯が石巻市指定文化財に	1
仏像調査について	3
仏像調査報告解説	4
仏像調査報告	6
専称庵寺板碑調査報告	18
紙上文化財めぐり	40
平成元年度文化財めぐり	44
旧町名表示石柱設置事業	45
文化財標柱・説明板設置事業	46

石巻市教育委員会





▲銅造阿弥陀如来立像



▲銅造觀音菩薩立像



▲銅造藥師如來立像  
(いずれも日野孝栄氏蔵)



▲木造薬師如來坐像（長谷寺）

## 仏像調査について

はじめに

日本において仏像は宗教的礼拝の対象物であるだけでなく、美術作品として鑑賞されてきた。そして、数多くの仏像が貯蔵・保存・保護の施策がとられている。

その所在と文化財としての価値を確認し、  
保存・保護のための資料を得ることとした。  
ところよく調査をお引き受けいただき、  
ました上原昭一東北大学文学部教授、調査に  
対応して貴重な仏像を拝見させてください。  
いました各所蔵者の皆様に心からお礼申

III 調査結果

四頁から一七頁に掲載

II 調査の概要

市内の各寺院等の仏像について一点ずつ調査カードの作成と写真撮影を行い、重要と思われる仏像について考察を加えた。

調査対象	石巻市内に存する仏像
調査期間	昭和六三年(一月) - 平成元年三月
調査担当者	東北大学文学部教授 上原昭一
調査補助	東北大学文学部助手 長岡龍作
東洋・日本美術史研究室	東洋・日本美術史研究室
野口昇	小田島由美子
久松浩	五十嵐一
小田島次	大賀洋
五十嵐成	朝堂雅彦
小田島大	神田雅彦



▲調查風景



#### ◀ 如来像の各部の名称

(注：ふつうのばあい、台座の上反花のかわりに、円がたの上敷茄子がおかれていることが多い。これに対して華盤の下の八角形の敷茄子を下敷茄子とよぶ。)

## 仏像調査報告解説

東北大大学文学部教授 上原昭一

石巻市教育委員会からの委嘱をうけ、

市全城にわたる文化財調査を、足かけ三

年に及んでおこなった。

未知の地域への調査はいづこの場合でも、そうであるように、その土地の歴史が古ければ古いほどそれを伝えるなんらかの痕跡にふれることができ、その土地が伝え守ってきた文化遺産に出会えることへの期待がふくらむものである。

北上川の河口に位置する当市はその上流域の岩手県側に数多くの文化財を伝えており、入口でもあり、またその流域の出口にもあたつていただけに、当然、流域文化との関係を証する遺品の伝存することが予想された。しかしながら、調査結果からみて、中、上流域との関連を語る遺産と出会うことができなかつたといわざるをえない。

現存遺品の大半は藩政以後の宗派と関連する江戸時代の作が占め、室町時代以前に遡る作例はきわめて少なかつたといふことを申し上げざるをえない。その歴史的事情を語る場ではなく、また任でもないので、ここでは調査対象だけを探り上げ概観するにとどめたい。

石巻市の全城へ向かって北上川の左岸地たことは河口に向かって北上川の左岸地に室町時代以前の作品が点在していること、それに對し繁華街を構成する町中

の右岸地区には江戸時代の作が集中して

いるという傾向が指摘されることである。

ことに左岸地区で特筆される遺品は仁

田山の洞源院に伝えられる新羅統一時代の金銅菩薩立像である。寺伝は源義家の兜に載せた陣守本尊との伝承があるようだが、それはともあれ、八世纪の朝鮮新羅作である。現状からみて土中鏑は施されたもので、最初から鍍金は施されていない。

伴うところ、いつの頃か定かではないが

発掘した陣守本尊もその上に載せられた。

もろんこの新羅仏は統一新羅の成立

した七世纪中葉以降、八世纪末にかけて

展開した作風の変遷からみると最末期に

近く、あるいは高麗時代とする見解もあ

ろうが、面長な面貌、胸のしづり、腰部

のふくらみなど新羅統一時代の作とみて

よい。

東北地方には何体か、興味深い渡来仏がある。それらがどういう理由でこの地

方に伝えられてきたかはつきりしてい

ない。この像もまたその点では同様にナ

イ。この像もまたその点では同様にナ

イ。

ところ、調査中なにかこの地固有の

古い作品があつてしかるべきだと期待して

いたところ、高木地区の日野孝栄氏が

如来坐像、觀音菩薩立像の三軒の鎌倉末

期の金銅仏と出会うことができた。十一

世前後のそれぞれムクの一鋲像で、

ことに觀音の台座背面に「高木」の刻銘

があり、この三尊が同時期に造像された

この地伝來の遺品であることが知られた。

鎌倉中期以降、鐵仏をふくめて再び金

銅仏の時代になる。善光寺式三尊の全国

的な普及と転用をして、別尊の小金銅

仏も数多く造られ、さらに懸仏も盛行す

る。日野家藏の小金銅仏もそうした時代

の流れの中で、土型による一鋲像として

新羅作である。現状からみて土中鏑は施

されていない。

この三軒の金銅仏に出会ったことから、

なお多くの作例にお目にかかるのであ

る。

一方、市街地の永義寺には平安後期も

陝政期の作である觀音坐像の頭部だけが

ろうという期待がたかまつた。

しかし、鎌倉時代の作例とは残念なが

ら出合えなかつた。ところが吉野町の多

福院に秘仏として伝えられている木造大

日如來坐像があつた。五角型の宝冠を戴

き、胎藏界宝印の大日の形容で、頭体幹

部を前後矧ぎにし、膝前を別材で矧いだ

り地上に伝世してきたものではない。な

くとも、樹木を用いた坐像であるが、樹木を用いた

作としては全国的にも珍しい作品であり、

作風から南北朝時代とみてよいもので、

この像こそ東北地方に平安以降強く長い

教団を築いてきた天台の造像活動のなか

でつくられた像例であることを想定させ

るものであった。



▲木造大日如來坐像（多福院）



▲木造觀音菩薩坐像頭部（永嚴寺）



▲木像菩薩如來坐像底部（長谷寺）

江戸時代に補作された体幹部に焼き寄せられた痕跡で伝わっていた。いかにも和様の目立ちをもつこの頭部は、永嚴寺本来の伝来かどうかは定かではないものの、平安期に石巻にこのような観音像を祀る寺院のあったことを知らせるもので、洞源院の新羅仏を除いては石巻最古の観音頭部といふことができる。

調査の当初、もっとも古い像が残っていると考えられた真野の長谷寺では、木造十一面觀音立像があり、それははつきり申して、作期のつかめぬ作品で、室町時代頃と想定するにとどめるほもなく、それよりも同寺の木造薬師如來坐像に注目された。像底に「四条東洞院大仏師法

眼観教」が水禄十一年（一五六八）に造立した旨の墨書きがあり、桃山時代の仏師の動向を知る上で貴重な作例である。水禄在銘にみられるように、それ以降、石巻の諸寺に伝わる江戸期の諸作は絶じて京都の仏師屋でつくられ、運ばれてきたものとみてよく、それらはただ石巻に限らず全国的な傾向があった。したがって個々の作例については解説をはぶき、報告書にゆだねることとする。

石巻全城にわたる調査の際にはその度



▲高木刻印

# 石巻市仏像調査報告

調査員：東北大學文学部教授 上原昭一  
東北大學文学部助手 長岡龍作

## 凡

### 例

・報告は、原則として、寺院名、仏像名、仏像の時代・法量・形状・品質・構造について記載してある。記載内容に精緻があるが調査時に種々の都合でデータがとれなかつただけで他意はない。また、仏像には写真と对照できるように通し番号を付した。

・調査は、すべての仏像・寺院について行いえたわけではなく、また文化財・美術作品としての観点から行ったものであることを明記しておく。(石巻市教育委員会)

多福院 吉野町一丁目4-9

一一聖 室町時代

#### 1. 木造觀音菩薩立像

##### <法量>

高135.3 像高128.7 面長14.4 面幅12.3 面奥17.1 胸奥14.8 腹張22.6 腹張24.6

##### <形状>

両手は屈臂して、左手は腹前で蓮華を持ち、右手を胸前で蓮華に添える。天衣・衆相・裳を着し、蓮実上に直立する。

##### <品質・構造>

頂上盤から台座連座まで両手を含んで一本から木取りし、内別りはない。木心は前方に外す。左肘の一部を欠失する。下肢背面に45.6×6.8cmの浅い彫り込みがある。背面に大振りの手斧痕がある。



1

#### 2. 木造大日如來坐像

一一聖 室町時代(南北朝)

##### <法量>

高34.0 面長8.6 面幅7.0 面奥9.1 胸奥7.6 坐基15.0 腹張23.4

##### <形状>

頭上五角形の宝冠を着し、法界定印を結び、右膝前にて結跏趺坐する。天衣・衆相を着け、腕輪を脱出する。

##### <品質・構造>

奇木造。頭上冠を含んで頭体幹部は耳後1.7°の傾きで前に削り矧ぐ。両体間にそれぞれ一材を寄せる。膝前に横一材。体側地付き部に三角小材を寄せる。肩先から上襟まで別材、前襟部は体側材と、



2

両手先は体幹部材とそれぞれ共木につくる。

洞澤院 渡波宇仁・田山2

一匣 新羅統一時代

### 3. 銅造菩薩立像

〈法量〉

総高18.8（木製台座含む） 像高12.4 面長1.5 面幅1.6 面奥1.9 脚奥1.4（中央） 片張3.5

脚張1.0 腹張2.8 天衣最大張3.9

〈形状〉

右手を屈臂し宝珠を持し、左手を垂下して立つ。天衣・条帛・裳を着す。垂髪は肩上の天衣に至り先端は三条に別れる。

〈品質・構造〉

頭頂より足先まで一筋、内部を中心とする。後頭部、下半身背面及び像底に穴を穿ち中型土を抜く。頭・体部は貫通しない。足裏よりはぞを作り出し台座（後袖）と接合する。背面（頭頂より3.4°）下がる）にはぞを作り出す。はぞ：基部幅0.4、厚0.2、H0.5、先端は欠失するか。

### 4. 木造觀音菩薩・不動明王・毘沙門天三尊

三龕 江戸時代

永慶寺 羽黒町一丁目1-27

一匣 頭部平安時代後期 体幹部江戸時代

### 5. 木造觀音菩薩坐像

一匣

〈法量〉

像高32.8 面長9.3 面幅9.0 面奥11.8（鼻先）

〈形状〉

右手上は蓮華を持し、左手上は輪無葉印を示して、右足前で結跏趺坐する。頭部のみを当初とし体部は後袖である。頭上に頭袋の宝冠（後袖）を着す。

〈品質・構造〉

三道第一段目より上部を当初とする。頭部は左耳中央及び右耳後1.5°を通る線で背後に割り離す。唇は其木より彫出。白毫相彫出。布下地として漆添、金箔はすでに剥落する。鼻先・唇基部の一部を欠失する。

### 日野孝栄

一一  
—匣 錬金時代末期

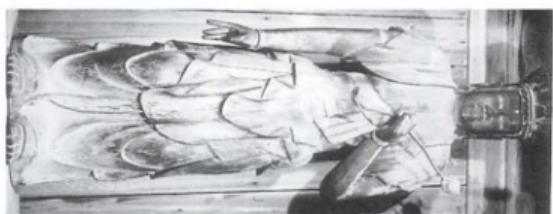
### 6. 銅造觀音菩薩立像

〈法量〉

総高12.1 像高10.0 面長1.45 面奥1.55 面幅1.25 脚奥1.6 脚張3.2 天衣最大張3.4

〈形状〉

左手は左胸前で五指を捻じ（持物欠）、右手は胸前にあわ掌を左前方に向ける。天衣・条帛・裳を



9



11

着し蓮台上に直立する。背面は着衣等の表現を省略する。

〈品質・構造〉 頭頂より両手を含んで台座反花まで、むくの一頭とする。鍍金の仮跡は認められない。台座背面に「高木」の刻銘がある。

### 7. 銅造薬師如来立像

一般 鎌倉時代末期

〈法量〉 縦高10.95 像高9.45 幅長1.4 幅幅1.45 幅奥1.7 胸奥1.55 肘張3.5 脇張2.45

〈形状〉 通肩の衲衣を着し両手を組み般前にて薬壺を持し直立する。頭髪は肉髻基部を中心とする渦巻型をなす。背面の着衣表現は省略しない。

〈品質・構造〉 観音菩薩像に同じ

### 8. 銅造阿弥陀如来立像

一般 鎌倉時代末期

〈法量〉 縦高11.1 像高9.45 幅長1.25 幅幅1.4 幅奥1.8 胸奥1.35 肘張3.6 脇張2.3

〈形状〉 両手とも第一、二指を捻じ、右手をあげ左手を下げる栄運印を示す。通肩の衲衣を着け蓮台上に直立する。頭髪は肉髻基部を中心とする渦巻型とする(薬師如来に同じ)。背面の着衣表現は省略しない。

〈品質・構造〉 観音菩薩像に同じ

### 長谷寺 真野宇壹原5

一般 室町時代

9. 木造十一面觀音立像

〈法量〉

像高240.5 幅長25.3 幅幅18.3 幅奥26.6 胸奥23.0 (右) 幅張47.2 脇張56.2

〈形状〉 天衣・条帛・裳を着し左手は屈臂して蓮華を挿す水瓶を持し、右手は垂下して与願印とする。頭上には十二面を戴く。

〈品質・構造〉 体幹部を前後二材で寄せ、鋳製縫によって接合する。両肩先右手全体と左手上腕部を別材で寄せ、木製縫によって接合する。条帛垂下部、両足先は別材矧ぎ寄せ。白毫相水晶は後添。



13



12



14

## 10. 木造薬師如来坐像

—聖 桃山時代（永禄十一・1568年）

<法量>  
像高30.4<形状>  
左手にて薬莖を持し右手を施無畏印として坐す。<品質・構造>  
体幹部は左右三村を寄せ、膝前に一材を寄せる。頭部は面開きとし玉眼を嵌入する。両袖先は別材を矧ぎ寄せ、両手先は後縫である。肉唐珠、白毫相に水晶に嵌入する。下口唇よりあご先を欠失する。  
<第>  
像底に墨書銘がある。

「四季東院大仏御法要延教（光明）大僧都本□明定・永禄十一辰□古歌白」

## 11. 木造千手觀音立像

—聖 江戸時代

<法量>  
能高44.0 像高32.2

15

## 12. 木造地蔵菩薩半跏像（本尊）—聖 江戸時代

<法量>  
一聖 桃山時代<形状>  
左手に宝珠、右手に錫杖を持し左足を踏み下げて半跏とする。

## 13. 木造地蔵菩薩坐像（本尊）—聖 桃山時代

<法量>  
一聖 桃山時代<形状>  
像高31.4 面幅5.4 面奥6.5 胸奥7.1 坐奥14.7 肘張17.5 腹張25.5<形状>  
左手に宝珠右手に杖（後縫）を持し結跏趺坐する。<品質・構造>  
体幹部は一木より造り、膝前に一材を寄せる。内側りはない。右手先は別材を矧ぎ付ける。

## 14. 木造マリア観音立像

—聖 江戸時代

<法量>  
像高31.2 面長5.6 面幅3.5 面奥6.5 胸奥5.2 脇張13.4 腹張9.5<形状>  
大袖の衣を着し、脇前で帶を結び先端を前方へ長く垂らす。胸前に幼児を抱く。

16

<品質・構造>  
全体を一本から造り内側ではない。彩色を施す。両手先、唇欠失。正面中央より左寄りに干割れがある。

真法寺

15. 木造釈迦如来坐像

--般 江戸時代

<法量>  
総高52.9 像高24.0

16. 木造聖観音菩薩坐像

--般 江戸時代

<法量>  
総高93.0 (光背を含む) 坐高41.5

17. 木造不動明王立像

--般 江戸時代

<法量>  
総高81.5 像高44.0

18. 木造毘沙門天立像

--般 江戸時代

<法量>  
総高71.8 像高44.8

19. 吉祥寺 木造阿弥陀如来立像

--般 江戸時代

<法量>  
総高21.5 像高14.6

20. 木造觀音菩薩立像

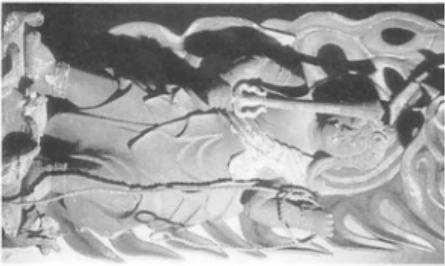
--般 江戸時代

<法量>  
総高68.2 像高50.8

21. 木造阿弥陀如来坐像

<法量>  
総高54.0 像高46.7 頭一頭18.7 頭長12.2 頭幅11.2

20



17



18

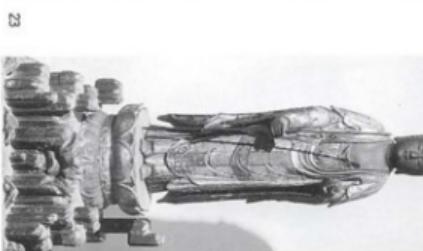


19



21

- 耳張13.5 右染張12.0 面奥13.6 胸奥(左) 16.1 腹奥18.4 腹奥30.1 腹張46.0  
膝高(右) 8.7 (左) 8.7
- 〈形状〉 傷袒右肩に衲衣を着し、腹前で赤蛇定印を結び、右足前に結跏趺坐する。螺旋、肉髻珠、白毫相をあらわす。
- 〈品質・構造〉 体幹部は前後に二材を寄せせる。両腰に二材を寄せるが、このうち左側のものは肩まで続き、右側は腰部のみ。腰前に一軸。頭部は剃首とする。前身に膝庇を施す。内身部はやや赤みがかる。像底には麻布を張る。
22. 沖縄寺 法量阿弥陀如来立像
- 般 江戸時代
- 〈法量〉 像高61.1
- 〈形状〉 納衣と偏衫を着し、米涅印を結んで直立する。
23. 木造如来形立像
- 般 江戸時代
- 〈法量〉 像高38.2 総高38.2 面奥5.7 胸奥7.7 腹奥11.2
- 〈形状〉 納衣と偏衫を着し右手を挙げ左手を屈臂して直立する。
- 〈品質・構造〉 台座を含んで一本から成る。内例りはない。内身部には金箔を施す。他は漆塗りとする。裏面に墨書きがある。右手先は欠失、左手先の一部を欠失。
- 洞仙寺 桐油字寺下6



22

25



24

24. 木造如来坐像
- 般 江戸時代
- 〈法量〉 像高36.0 変際高31.5 背幅12.4 面長7.4 面幅7.5 面奥9.8 胸奥11.2 腹奥12.6 (衣不含)
- 〈形状〉 背張21.7 背張21.6 腹張30.0 膝高(右) 6.0 (左) 5.7
- 〈品質・構造〉 納衣を傷袒右肩に纏い、右足前に結跏趺坐する。左手は足上で仰掌とし、右手は屈臂し腹前で左手に添える。

<品質・構造>  
脇前に一材を寄せる。右肩、左手首で矧ぐ。他の構造の詳細は不明。玉眼とする。白毫は木製。肉身に漆苗を施し、着衣は金泥書きの文様（雷文繋ぎ、円盤ぎ、蓮華唐草、四葉入り七宝繋ぎ）を表す。

## 25. 木造地蔵菩薩立像

一筆 江戸時代

<法量>

像高66.7 前長8.7 面幅5.6 耳張6.5 耳朧5.7 面奥6.6 背張14.1 脊張11.2  
足先開 (内) 2.8 (外) 6.5

<形状>

右手は下げ錫杖を握り、左手は屈臂し仰掌として宝珠を執る。内衣、腰衫、衲衣、裳を着し直立する。

<品質・構造>

構造の詳細は不明。袖垂下部は別材を寄せる。肉身體は金泥影、着衣部は金泥上に彩色（朱、白、墨、群青、絵青）を施す。裳、衲衣の地紋に斜様のものでひっかいたような細線の文様を表す。

26.

## 木造大日如来坐像

一筆 江戸時代

<法量>

像高32.0 髪際高26.7 耳張6.3 面奥7.2 腹奥7.5 股奥8.4 坐奥11.3 脊張20.0

<形状>

衆品、裳を着け、宝冠をかぶり、腹前で定印を結び、左足前に結跏趺坐する。地盤は前方はまばら、後方は則ます背面に長く垂らす。

<品質・構造>

体幹部を一本とし、両肩、両前脚半ばで矧ぐ。定印を結ぶ両手先は一太。脇前、両膝脛をそれぞれ寄せる。内側りはない。宝冠内部はすり棒状にくり込む。白土地に漆苗を施す。右腰後方に紙を貼って剥がれた痕がある。袖修によるものか。脇前を大きく欠損する。両前脚半ばの内側と鼻先に欠損がある。

長林寺 水明院二丁目12-8

一筆 江戸時代

## 27. 木造聖観音坐像

<法量>

像高27.7 腹際高19.9 耳張5.8 面奥6.5 腹奥7.2 脊張8.0 坐奥15.3 脊張18.1  
(形状)

両手を屈臂し、左手は水瓶を執り、右手は仰掌とする。頭冠の頭飾を着け、天衣、条裙、裳を着し



26

27



28

て、右足前に結跏趺坐する。

〈品質・構造〉

骨を含んで頭体部を一木から造る。内側りはない。胸に穴を埋めた鉢があり、表身其を留めるためのものと思われる。白毫は木製埋め込み。

両肩先、膝前、脚板製の頭飾は後補。鼻先は小鼻半ばより先に後世の補修による別材を接着する。全身に白土地上の補彩痕が見られる。頭部等基部の背面を折損する。

舟橋寺 羽黒町

28. 木造薬師如来坐像

一一  
江戸時代

〈法量〉

像高45.6

〈形状〉

偏多の上に袖衣を偏袒右肩に纏い、両手を屈臂して、右手は前方を向け、左手は仰掌として薬壺を持す。左足前に結跏趺坐する。

〈品質・構造〉

体幹部を上下二材に組み合わせ内側りはない。玉眼。肉身部を金泥彩を施す。

零羊崎神社 深穴牧山1-1

一一  
当初期は室町時代か。

〈法量〉

像高50.0 脇奥15.8 腹奥24.5 坐奥40.4 肘張35.6 袖張61.6

〈形状〉

鳥帽子をかぶり、袍、袴を着す。右手に扇を持ち、左腰に劍を差す。両足裏をあわせて坐す。

〈品質・構造〉

体幹部は八材を寄せ、さらに、両体側面、膝前に材を寄せる。内側りはない。頭部のすべてと両手先は後補。全身に後世の泥絵の具をかぶる。

30. 木造悪玉御前坐像

一一  
室町時代

〈法量〉

像高27.3 脇奥9.8 前幅5.6 背幅8.1 腹奥9.0 脇奥10.5 坐奥20.6 肘張19.9 袖張25.1

〈形状〉

筒袖の内衣の上に大袖の衣を着し、合掌して正坐する。

〈品質・構造〉

頭部等は一木から成る。像底と背面部から内側りを施し、背板を當てる。背板は頭部にまで至る。膝



前に一材を寄せる。頭部内中空部に一材を入れる。背板、膝前材、頭部内の一材は後補。鼻先、合掌する手先を欠損する。

31. 木造如来形残欠  
本木家 大字字八津山

—般 室町時代

像高60.0 扉—頭19.2 面長14.1 耳張11.9 面奥14.2 最大奥（袖先—背面）12.0 肘張（最大幅）27.1

〈形状〉

通肩の白衣を着け両手を屈臂する坐形。

〈品質・構造〉  
一木造り。内削りを施す。髪型は刻みだす。白毫のための穴を穿つ。体部後半材、膝前材、白毫を欠失する。

32. 木造文殊騎獅像  
高橋精一

—般 室町時代

〈法量〉

像高29.8（蓮子を含む） 像高20.3

〈形状〉

天衣、余帛を着け、左手を屈臂して坐す。右足は左足上にはのせない。蓮子坐に乗る。

〈品質・構造〉  
文殊菩薩は体幹部根幹材を一本とし、左腰脇に三角材、右脇後方に小材を寄せる。両肩先を切ぎ付けとし、左手前腕部で矧ぐ。右足先羽根羽根ぎ付け。玉眼。蓮子坐は一本より成る。漆堆り（赤色を呈す）。獅子頭部、文殊菩薩着衣部、左足部を別材で彫ぎ付ける。後方中央に光背のための穴を設ける。右肩先を欠失する。

〈時代〉  
蓮子裏面に「享禄三年建立」の刻銘がある。1530年（室町時代）

33. 木造聖観音坐像  
松盛院 田代派大治55

—般 室町時代

〈法量〉

坐高31.8 見際高22.4 扉—頭15.8 面長6.7 面幅6.4 耳張8.3 耳朵張7.8 面奥8.5 坐奥22.3 肘張14.9 肘張19.3 膝張22.5 膝高（右）54.9（左）5.1

〈形状〉

偏衿を着し、その上に脇袒右肩に衲衣を纏う。両手を屈臂し、右手は衣端を握り、左手は第1、3指



33



32



34

を捻じて裏面に寄げる。右足前に結跏趺坐する。臂を差り、その前方に化仏を配する。

〈品質・構造〉

体幹部は前後二材とし体幹部は左側で二材、右側で一材とする。腰前に一材を寄せ、体幹部材と腰前手先は別材矧ぎ付けとする。腰前材は低部を浅く彫り込む。腰前材と中間材の接合は、差しとする。臂、両手先は別材矧ぎ付けとする。

全身に後縫の捺塗りを施す。彩色は後縫。化仏、天冠台、白毫を金色とし、口唇、光背に朱色を施す。

〈備考〉  
船内に寄進者名を墨書きする。

普賢寺 門脇字中通15

一般 江戸時代

34. 木造大日如来坐像

〈法量〉  
像高19.1

〈形状〉

柔らか、表を着け、宝冠をかぶり、腹前で智拳印を結んで、右足前に結跏趺坐する。

〈品質・構造〉  
体幹部材は前後二材とし、両腰脇に三角材を寄せる。腰前に一材を寄せせる。宝冠は銅製鍍金透彫。白毫は水晶。頭髪に墨色を施す。根幹材のみ当初のものと見做される。

広瀬寺 住吉町2-4-46

一般 江戸時代

35. 木造菩薩坐像

〈法量〉  
像高65.8

〈形状〉

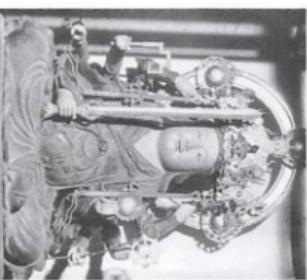
臂を結い、天衣、柔帛、掌を着し、合掌して坐す。頭部正面には銅製透し彫の冠飾を付ける。

〈品質・構造〉

体幹部は前後二材とし、地付きまで至る。その周囲を複数の材で明み下駄を形成する。銅製の冠飾を付ける。天衣、柔帛等は別材矧ぎ付けとする。右肩先が脱落している。

36. 木造弁財天坐像

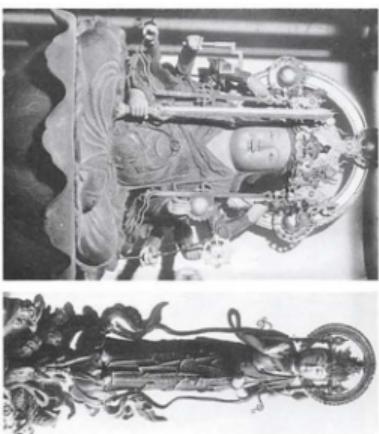
〈法量〉  
像高29.5



36  
37



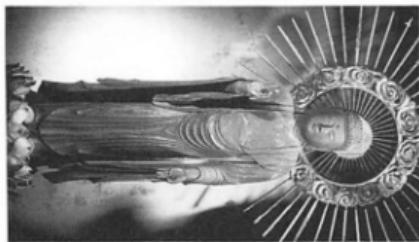
35



37. 木造聖觀音立像  
梅溪寺 湯子牧山18  
<法量>  
総高 442.8 像高30.5
38. 木造阿彌陀如來坐像  
西光寺 丹臨町2-5-7  
<法量>  
像高38.3
39. 木造觀音菩薩坐像  
吉祥寺 敦源字アチャヅル4  
<法量>  
像高37.0
40. 木造阿彌陀如來坐像  
慈恩院 吉野町1-3-15  
<法量>  
像高75.0 像高27.6
41. 木造毘沙門天立像  
<法量>  
総高107.3
42. 木造阿彌陀如來立像  
<法量>  
像高62.8
43. 木造觀音如來坐像  
広濟寺 住吉町2-4-46  
<法量>  
総高167.4 像高51.2



41



42



43



38



39



40

44. 木造地藏菩薩半跏像  
松盛院 田代源平大治55  
<法量>  
總高35.7

一般 江戸時代以降

45. 木造釋迦如來坐像  
瀧福寺 田代源平仁和4年  
<法量>  
總高17.6

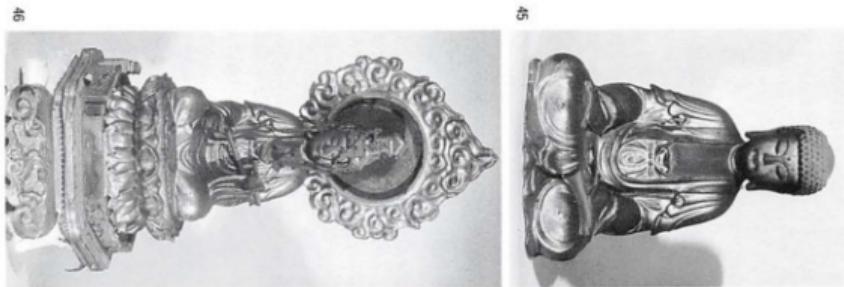
一般 江戸時代以降

46. 木造右脇侍像  
<法量>  
總高24.3 像高11.7

一般 江戸時代以降



44



45

46

# 專称廃寺板碑調査報告

石巻市文化財保護委員 佐藤雄一

調査期間

昭和六年七月二四日—二六日

調査員

佐藤雄一（宮城県石巻高等学校）

調査補助員

鶴原由起子、中村留美（石巻市立女子商業高等学校）

繁田忠美

高松美賀子（商業高等学校）

## 1. 鹿妻山専称廃寺の位置

石巻市鹿妻の鹿妻山の南麓にあたり、現在は菅原神社となっている。専称廃寺の板碑とされる名号板碑群は、この裏手に整理保存されている。

## 2. 鹿妻山専称寺跡

鹿妻山専称寺の縁起については、仙台市在住の葛西正人氏所有の文書をよりどころとした『石巻市史』第二卷（第八篇宗教第三章 廃寺の址跡）の記述が定説化しているようである。すなわち次のようないきさつである。

鹿妻山専称寺・登米郡寺池村・鹿妻山専称寺（時宗）は相州藤沢山清淨光寺の末人の開基也。上人は葛西家の子也。七歳の時間闇にて孤の為に城中より引出されしを尋ね、遊行一代佗説上人・巡國の御弟子となし、孤上人と世に唱えられしはこれなり。有德堅固にして、遊行五代の弟子、人皇九十五代後醍醐天皇即位七年正月十一日於武州芝宇宿

和山に取り移り在城の後、上人縁を以て添木の内鹿妻に於て専称寺を建立して七十石を寄付す。守本尊行基作の阿弥陀如来を納むその後当村へ在城刻、供養寺なり、没後以後退転及廢寺同然の所、遊行四十九代一法上人正徳二年修行の跡相尋

宗門にて奥州の古跡也。況や景色新たなる思ひ八景の和歌説す。

この記述による専称寺は遊行五代安國上人の開基にかかり、葛西氏の供養寺であつたとするのである。しかし、仙台市在住の葛西氏文書が信ぴよう性の高い史料として採用されてよいものかどうかの疑問が残るのである。

疑問の第1点は遊行五代安國上人が本当に葛西氏の出身であるのだろうかといふことであり、第2点は『石巻市史』の引用文献中にある

「（前略）遊行四十九代一法上人正徳二年修（遊か）行の跡相尋宗門にて奥州の古跡也。」

この記述が果たして眞実かどうかといふ点である。

第1点の安國上人の出自については

「遊行・藤沢岡上人歴代系譜」によると

遊行五代

藤沢二代

安國上人

の如きである。すなわち次

「中世社会と時宗の研究」の中で次のようにならわれている。

すなわち、安國上人の出身については、相模国谷とする他に二説あり、第一は大崎氏出身説であり、第二は葛西氏出身説であるという。その第一の大崎氏出身説を底本として翻刻されたものであるので、史料としての信ぴよう性は高いものと判断される。しかし、これとても、今井雅晴氏の指摘されているように、史実としめて説明できるわけではないという弱点はあるのである。

疑問の第2点については、「遊行日鑑」第一卷「正徳二年の項」に

正徳二年十一月三日寺崎登米専称寺暮六半御着・・・十一月九日戸米とよま専称寺御立、七半晨明御發馬

とあります。つまり、寺崎登米専称寺の御立は六泊七日の滞在である。そこから直接、石巻の専称寺跡に寄ったという記述はない。

これら二つの疑問点からして、『石巻市史』所収の鹿妻山専称廃寺にかかるる記述は、一応保留されねばならないものであると思う。

鹿妻山専称廃寺の開基を遊行五代安國上人とすることについて、今井雅晴氏は







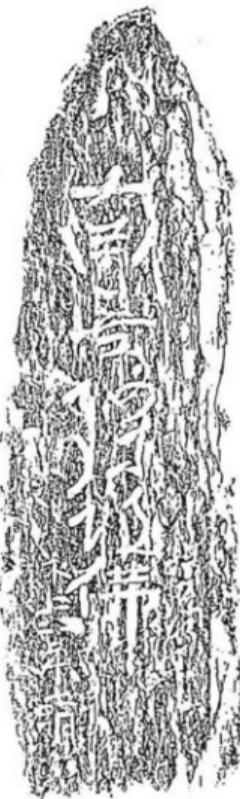


No. 2

(南無) 阿彌陀佛

建武四年正月三日  
西 阿彌陀佛  
元弘元年五月廿日

高さ : 120cm  
幅 : 31cm  
厚さ : 10cm  
<1331>  
<1337>



No. 1

□ 阿彌陀佛  
南無阿彌陀佛

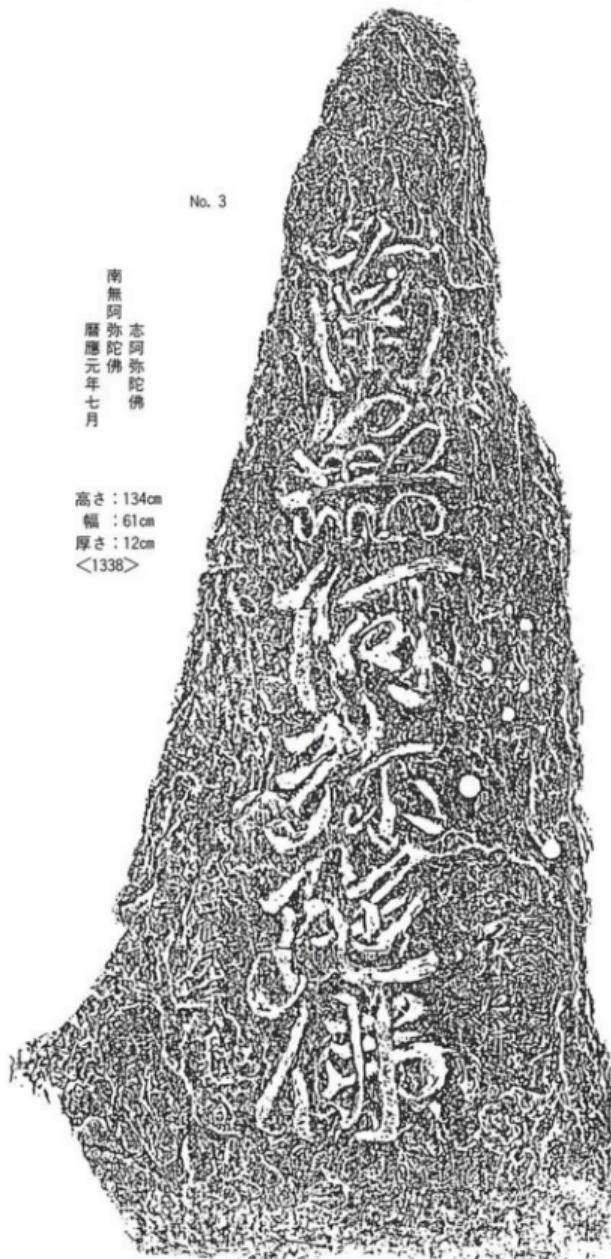
永仁二年七月四日

高さ : 85cm  
幅 : 24cm  
厚さ : 11cm  
<1296?>  
<1396>

No. 3

南無阿彌陀佛  
志同彌陀佛  
麻應元年七月

高さ : 134cm  
幅 : 61cm  
厚さ : 12cm  
<1338>



No. 4

南無阿弥陀  
文和三年

高さ : 60cm  
幅 : 40cm  
厚さ : 7 cm  
<1354>



No. 5

南無阿弥陀佛  
専弥寺二代  
貞治五年十一月  
十六日

高さ : 85cm  
幅 : 45cm  
厚さ : 7 cm  
<1366>



南無阿彌陀佛  
永阿彌陀佛  
貞治六年五月十九日

No. 6

高さ：127cm  
幅：43cm  
厚さ：15cm  
<1367>



No. 7



貞治七年六月二日  
清阿彌陀佛

高さ：49cm  
幅：26cm  
厚さ：6cm  
<1368>

No. 8

南無阿彌陀佛  
惠阿彌陀佛  
貞治七年三月六日



高さ：66cm  
幅：23cm  
厚さ：11cm  
<1368>

No. 9

(金) 大日 応安二年三月八日 敬  
主白施  
乃至法界平等利益□也  
右志者為一清同阿彌陀佛



高さ：83cm  
幅：29cm  
厚さ：10cm  
<1369>

No. 10

高さ：108cm  
幅：38cm  
厚さ：6cm  
<1374>

南無阿彌陀佛  
見阿彌陀佛  
応安七年七月四日



No. 11

高さ：88cm  
幅：26cm  
厚さ：9cm  
<1376>

時正 初日

南無阿彌陀佛  
正阿彌陀佛  
永和二年八月三日



No. 12

(金) 大日

右志者為過去先妣妙榮禪尼卅三  
 年之 乃至法界平等利益也  
 永和四年戊午 孝子敬  
 白

高さ : 100cm  
 幅 : 23cm  
 厚さ : 15cm  
 <1378>



No. 13



南無阿彌陀佛  
 住阿彌陀佛三十三遍  
 康二年三月廿四日

高さ : 88cm  
 幅 : 24cm  
 厚さ : 12cm  
 <1380>

No. 14

重阿弥陀佛  
南無阿弥陀佛 三十五日  
康暦三年二月廿四日



No. 15

妙阿弥陀佛  
南無阿弥陀佛 三十三年  
永徳二年五月廿八日

高さ : 80cm  
幅 : 30cm  
厚さ : 5.5cm  
<1382>



No. 16

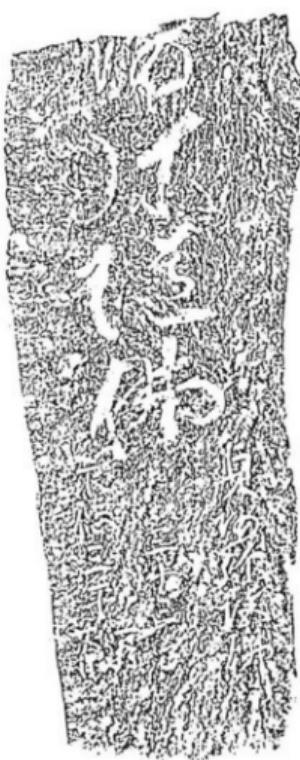
善阿弥陀佛  
修逆  
南無阿彌陀佛  
永徳二年七月廿八日



高さ : 90cm  
幅 : 25cm  
厚さ : 11cm  
<1382>

No. 17

(南無) 阿彌陀佛  
貞阿彌陀佛  
三十三年忌  
廿日  
永徳三年  
二月



高さ : 76cm  
幅 : 32cm  
厚さ : 13cm  
<1383>

No. 18

(欠) 阿弥陀佛 蓮阿彌陀佛  
至徳元年 五七日 王

高さ: 113cm  
幅: 37cm  
厚さ: 12cm  
<1384>



No. 19

南無阿弥陀佛  
朝阿弥陀佛  
第三年  
明徳三年  
九月  
六日

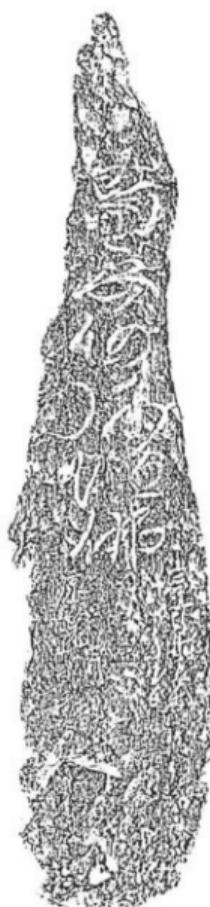
高さ : 96cm  
幅 : 40cm  
厚さ : 10cm  
<1392>



No. 20

廣永  
□□元  
十八日  
南無阿彌陀佛  
信阿彌陀佛  
四月

高さ : 96cm  
幅 : 18cm  
厚さ : 15cm  
<1394>





No. 21

南無阿  
弥陀佛  
理阿弥陀佛  
慶阿弥陀佛  
慶阿弥陀佛

九日 八月十二年  
广永二年



No. 22

高さ: 98cm  
幅: 39cm  
厚さ: 12cm  
<1395>

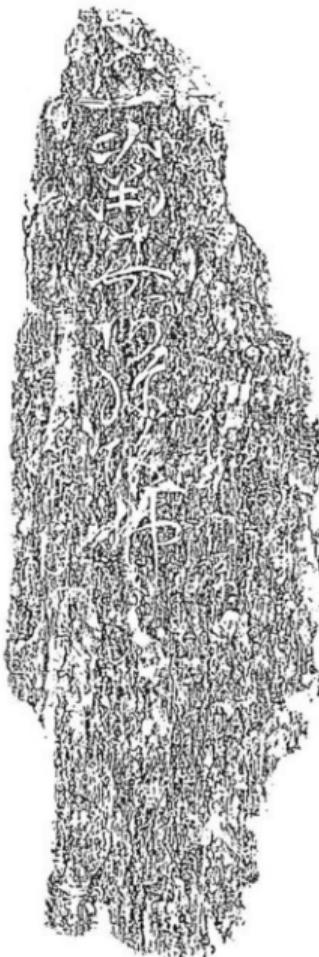
高さ: 83cm  
幅: 34cm  
厚さ: 16cm  
<1396>

無阿  
弥陀佛  
蓮阿  
弥陀佛

應永三年  
九月六日

No. 23

高さ : 104cm  
幅 : 31cm  
厚さ : 11cm  
<1411>  
南無阿弥陀佛  
列阿権門 百ヶ日  
應永廿八年三月廿三日



No. 24

南無阿彌陀佛  
智現禪門位  
應永二十二年二月七日  
<1414>



高さ : 94cm  
幅 : 18.5cm  
厚さ : 12cm  
<1414>



No. 26

南無阿弥陀佛  
専称寺四代覺阿弥陀佛位  
応永廿七年九月十日

高さ：142cm  
幅：32cm  
厚さ：20cm  
<1420>



No. 25

陀佛  
善阿彌門一周忌  
廿五年七月十三日

高さ：55cm  
幅：21cm  
厚さ：10cm  
<1418>

No. 27



高さ : 72cm  
幅 : 35cm  
厚さ : 7.5cm  
<1420>

無阿彌陀仏  
善□釋門□□年忌  
応永廿七年八月五日



No. 28

高さ : 88cm  
幅 : 30cm  
厚さ : 4 cm  
<1430>

南無阿彌陀佛  
歸西□阿彌陀佛  
敬  
永享二年十一月十八日

No. 29

南無阿弥陀佛 謹阿弥陀佛  
文龜元年七月廿九日  
孝子敬白

高さ：94cm  
幅：21cm  
厚さ：8cm



No. 30

南無阿彌陀佛  
飯西定阿彌陀仏位  
□

高さ：78cm  
幅：35cm  
厚さ：9cm



No. 31

南無阿弥陀佛  
千阿弥陀仏  
十一月十四日



高さ：70cm  
幅：28cm  
厚さ：5cm

No. 32

二

□  
□  
□  
□

年  
二  
月  
十

高さ：72cm  
幅：20cm  
厚さ：9cm



No. 33

高さ : 78cm  
幅 : 28cm  
厚さ : 12cm

(阿弥陀)



No. 34



高さ : 90cm  
幅 : 30cm  
厚さ : 13cm

(阿弥陀)

右志者 □□□□

往生橋渠 □□□

No. 35

(阿闍)

高さ : 92cm  
幅 : 32cm  
厚さ : 13cm



No. 37

南無阿

高さ : 50cm  
幅 : 33cm  
厚さ : 5cm



No. 36

南無

高さ : 45cm  
幅 : 26cm  
厚さ : 5.5cm

## 紙上文化財めぐり

### 歩いてみませんか

#### ふるさとの文化財

この紙上文化財めぐりもこれで三回目です。今回は、内海橋から湊方面を歩いてみましょう。

出発地点はダックシティ丸光石巻店前です。このデパートメントストアの前に石柱と説明板がたっています。いったい何の石柱と説明板なのでしょうか。

#### ② 旧石巻警察署跡

西岸にある町のなかでは最も古い町です。江戸時代のなかには、代官屋敷・八戸藩米蔵・旅籠などが並ぶ繁華街となっていました。現在は当時の面影を偲ぶ建物はありませんが、やはり石巻の繁華街であることは変わりありません。

その後、何度か改築が行われたのですが老朽化したので、昭和六年（一九三一）から八年にかけてコンクリート製の永久橋に架け替えられました。

#### ▲ 西内海橋



#### ① 「中町」

石柱は「中町」という今は使われなくなった昔の町名を後世に伝えるために当教育委員会が建てたものです。

「中町」は「本町」とならんで北上川

の近代警察は、明治六年の巡邏屯所の設置がその始まりです。その後明治二〇年に石巻警察署として門脇に庁舎を設置し、前述のように明治二〇年に類焼してしまったのです。建物は明治洋風の建築でした。

石巻の近代警察は、明治六年の巡邏屯所の設置がその始まりです。その後明治二〇年に石巻警察署として門脇に庁舎を設置し、前述のように明治二〇年に類焼してしまったのです。建物は明治洋風の建築でした。

それでは、よいよ歩き始めましょう。橋通りに出て右折し、西内海橋を渡ると中瀬です。右手に見える造船所へ曲がる角に説明板があります。

#### ③ 内海橋

説明板は「内海橋」についてのもので



#### ④ 旧石巻ハリストス正教会教会堂



▲ 旧石巻ハリストス正教会教会堂

する橋が四つありますが、内海橋はそのなかで一番はじめに架けられた橋です。「内海橋」という名前は、橋を架けた内海五郎兵衛にちなんでいます。明治五年（一八八三）に数々の困難を乗り越えて架橋に成功しました。その間通りにあたり当時の宮城県令（県知事）松平正直が内海五郎兵衛の功績を讃えて「内海橋」と命名しました。

このときの橋は木橋で、内海五郎兵衛が通行料を徴しました。明治三十三年に橋が老朽化したので、昭和六年（一九三一）から八年にかけてコンクリート製の永久橋に架け替えられました。

ちょっと寄り道して、説明板のある角を右に曲がり、造船所の方へ歩いてみましょう。道の両側にきれいな公園が広がっているところに出ます。左側の公園内に白い洋風の建物が見えます。

三年には教会堂が建てられました。一人の信徒からなる「兄弟会議」が結成され、建設の大さな力となり、建設費九九円はすべて信徒からの献金でまかねられたということです。

木造二階建・総瓦葺で、外壁はしっくい塗りと下見板張になつており、正面は八角形の張り出しがビザンチン様式を日本式の手法であらわしたものです。軒先瓦には十字を入れたものがあります。建物の正面にも同じような十字があります。この肉太の十字は「ふくべ十字」といいます。一階は居室と集会所、二階が礼拝を行うところになつていました。

寄り道はこのくらいにして公園を出ることにしました。

東内海橋を渡ると湊地区に入ります。国道三九八号線沿いに、歩道橋をくぐり右に曲がりましょう。左側に山が見えます。そのなかの五松山には、数々のすばらしい遺品が出土した洞窟遺跡がありますが、残念ながら今は埋め戻しがあるので見ることはできません。どんどん歩いて行き、信好を左に曲がり細い道に入る正面にお寺が見えます。正面のお寺の左側、学校のすぐ裏にも別のお寺があります。正面のお寺が多福院（曹洞宗）、左側のお寺が慈恩院（臨済宗）です。まことにしましょう。

⑤長崎山慈恩院  
長崎山慈恩院は、江戸時代の初め当時の漆村の領主篠町元清が亡き母の冥福を祈るために、松島瑞巣寺の高僧雲居禪師を

招いて開山として建てたお寺です。境内には中世の板碑やお墓のほかに、倒れたままの墓石があります。これが慈恩院の「倒れ墓」です。この「倒れ墓」には次のような話が伝えられています。

並町元清は、慈恩院ばかりではなく、牧山に長寺寺というお寺も建てました。こ

#### ◀倒れ墓



う。慈恩院を出て多福院へ行つてみましょ

#### ◀草刈山板碑群

榮存法印に対し妬み、恨みのあつた並町重頼は、無実の罪を着せて榮存法印を江島に流された榮存法印は並町重頼を祝詔し続け、亡くなりました。その後、淡村が大火に遭い、並町家の人々はことごとく喪失してしまつたのです。「倒れ墓」は重頼の子安頼の墓で、起こすとたたりがあるといわれています。

死後五〇年たつて無実であることがわかった榮存法印は許され、そのためを鎮めるために牧山に榮存神社が建てられ神として祀られたということです。これいかがですか。これは伝説に過ぎませんが、地元に伝わる話はそれがどんなものであれ、語り継いで行きたいものです。

多福院は現在は曹洞宗のお寺ですが、以前は天台宗であったと伝えられています。並町元清の父翁持が祖靈供養のため、天台宗月光山日輪寺庵庭に堂宇を造り、元龜元年（五七〇）庵庭の堂宇が寺西盛岩存茂を開山として日輪山多福院と称したのが多福院であるといわれています。

多福院の山門をくぐり、境内に入つてすぐの右側に石碑が並んでいます。これは板碑といい鎌倉時代から戦国時代にかけて建てられた塔婆の一種です。多福院の境内には多くの板碑があり市の指定文化財になつています。戦国時代以前の石塔地方についての古文書はほとんど残っていないので、この板碑は中世の石塔を知るための貴重な資料となつています。

本堂の左手奥に石碑の収められた小さなお堂があります。この石碑が「吉野先帝塔碑」です。これは後醍醐天皇が死んだときに供養のために造立されたもので、造立したのが誰なのかについては、葛西清貞はじめ色々な説があります。ただ、石碑の文字に手を加えられた跡があるといわれ、様々な憶説をよんでいる石碑です。

この「吉野先帝塔碑」の右手に、草刈山から移された板碑群があります。この板碑群のなかには葛西当主やその一族の供養碑として建てられたと考えられるものがあります。一つは、興國四年（一三四三）の「蓮阿の碑」と呼ばれる板碑で、「蓮阿」は葛西氏の当主葛西清貞かその子良清であるといわれています。もう

#### ⑥日輪山多福院

ひとつは、興国四年四月二五日の「遠州平清口」（文字不明）の五七日供養碑です。この「遠州平清口」は、葛西守邦の甥で北朝側にいる」と考證され殺された「遠江守清明」であると疑えられています。碑が「遠河の碑」や「遠州平清口」の碑であるかは碑文をよく見てみなさうがさがしてみてください。

本堂の方へ戻りましょう。戻る途中の右側に「中村庄右衛門定春」の墓があります。中村庄右衛門（正衛門）の墓春は、明石の出身で南北朝時代に伊達家に船大工の棟梁として仕えるようになつたといいます。庄右衛門は瀬戸内海の進んだ技術をもつて江戸へ直航できる大きな船を作つたといわれています。石巻における造船の祖といえる人であります。これが大日堂で南北朝時代に造られた大日如来がおさめられていました。この大日如来は護良親王の障中守本尊と伝えられ、六〇年に一度だけ開張する秘仏です。今度の開張は平成一〇年（一九九八）です。

⑦モクゲンジの群落

ところで、今まで五松山から多福院にかけて歩いて来ましたが、この辺の山から市内最大のモクゲンジの群落があります。

モクゲンジは古くから寺の境内などに多福院を出て、国道三九八号へ戻り大門崎の方へ歩いて行きましょう。

一四二

ひとつは、興国四年四月二五日の「遠州平清」(遠州平字不明)の五七日供養碑です。この「遠州平字不明」は、葛西氏の子の甥で、北朝側に通じていると疑われる殺された「遠江守清明」であると考えられています。どの碑が「遠阿の碑」や「遠州平清」の碑であるかは碑文をよく見てみなんざんがさがしてみてください。本堂の方へ戻しましよう。戻る途中の右側に「伊豆庄右衛門定春」の墓がありまます。中村庄右衛門(正衛門)定春は、明石の出身で江戸時代の初め(寛永年間)に伊達家に船大工の棟梁として仕えるようになつたといいます。庄右衛門は瀬戸内海の進んだ技術をもつて江戸へ直航できる大きな船を造つたといわれています。石巻における造船の祖といえる人でしょ

植えられたといわれるムクロジ科の落葉高木で、日本には自生しない植物だと言われて来たのですが、日本にもモクゲンジの野生地があることがわかり、石巻市内にも何か所か確認されました。昭和六年度に行つた調査では五松山から石赤十字病院の裏山にかけて三ヶ所の生息場所一三株群が発見され、花の開花時期は七月下旬から八月上旬にかけて鮮やかな黄色い花を咲かせます。みなさんもこの時期にモクゲンジの花を見にきてみてください。

⑨ 大門崎は故山

さて、一皇子神社はこのくらいにして  
大門崎を見てみましょう。

⑦ モクゲンジの群落

多福院を出て、国道三九八号へ戻り大門崎の方へ歩いて行きましょう。

ら石巻赤中字病院裏山にかけてには市内最大のモクゲンジの群落があります。

大門崎を見てみましょう。

疲れた方は、近くのバス停からバスに乗って戻られたらよいと思います。  
みなさんお疲れさまでした。

多福院を出て、国道三九八号へ戻り大門崎の方へ歩いて行きましょう。

白石備後守に向かておもがりあります。これが大日堂で南北朝時代に造られた大日如来がおさめられています。この大日如来は護良親王の陣中守本尊と伝えられ、六〇年に一度だけ開張する秘仏です。今度の開張は平成一〇年（一九九八）です。

きる大きな船を造ったといわれています。石巻における造船の祖といえる人でしょう。

に伊達家に船大工の棟梁として仕えるようになつたといいます。庄右衛門は瀬戸内海の進んだ技術をもつて江戸へ直航で

本堂の方へ戻します。戻る途中の右側に「中村庄右衛門定春」の墓があります。中村庄右衛門（正衛門）定春は、明石の出身で江戸時代の初め（寛永年間）

どの碑が「蓮阿の碑」や「遠州平清□」の碑であるかは碑文をよく見てみなさん  
がさがしてみてください。

この「遠州平清〇」は、葛西当主の甥で北朝側に通じていると疑われて殺された「遠工守清明」であると考えられます

⑧ 一皇子神社

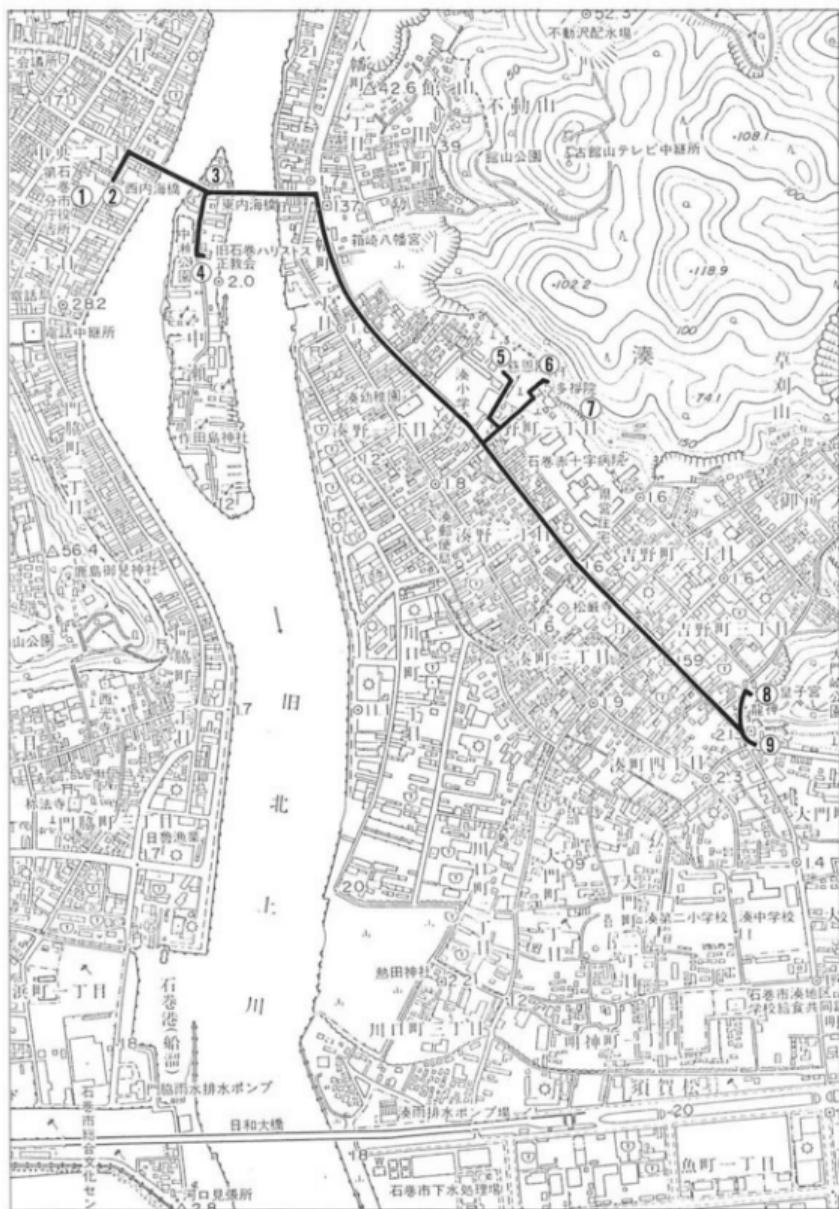
大門



さて、ここまでずいぶんと歩いてきました。お疲れになりましたか。まだまだ歩けますか。とりあえずご案内はこの辺で終わりにしたいと思います。

元気のある方は、大門崎から牧山へ歩いてみてください。牧山そのものが貴重な文化財ですから、途中で様々なものを見る事ができます。

## 紙上文化財めぐり地図



# 平成元年度

## 文化財めぐり

平成元年度は三回の文化財めぐりを実施しました。平成元年は、松尾芭蕉が奥の細道を旅してからちょうど三〇〇年目のことを記念して「芭蕉・歌枕のめぐり」を第一回文化財めぐりとして実施し、第二回は本年度新たに指定した文化財を見学する「新指定文化財をたずねて」、第三回は「近代石巻のあゆみをたずねて」として石巻市及び矢本町・鳴瀬町の明治から現代までの文化財の見学を行いました。

梧桐の筆による「芭蕉翁一宿之跡」碑、登米懐古館・警察資料館（旧登米警察庁舎）を見学し、武家屋敷・土蔵造りの商店が並んだ通りなどを歩きました。残念ながら旧登米尋常小学校は、補修中で見学できませんでした。

### 第二回文化財めぐり

#### 新指定文化財をたずねて

月日 一〇月二九日（日）  
講師 桥本品文化財保護委員  
参加者 二三人

#### 第二回文化財めぐりは、平成元年度に新たに指定した仏像を中心に行いました。

市役所前から洞源堂（仏像）、長谷寺（仏像）、龍泉院（大イチヨウ）、日野氏宅（仏像）、吉祥寺（大イチヨウ）、旧石巻ハリストス正教会教会堂、寿福寺（鉄筋場板人骨供養碑）、永嚴寺（仏像）を見学しました。

### 第三回文化財めぐり

#### 近代石巻のあゆみをたずねて

月日 一一月五日（日）

講師 石垣宏文化財保護委員  
参加者 二三人

参加者四八人で行われた第一回文化財めぐりは、汗ばむほどの陽気でめぐまれたなかで、芭蕉の足跡をたどりながら、石巻市内の歌枕の地をめぐって芭蕉一宿の地である登米を最終目的地として行わされました。

市役所前を出発し、袖のわたり、尾ぶちの牧、おくの海、真野萱原の各歌枕の地を訪れ、「おくの細道」に出てくる「心細き長沼」の河北町合戸谷とおり、登米町へ着きました。登米町では、河東碧



ぐり、これまで意外と知られていないかつて明治以降の石巻についての認識を深めることができたたと思います。

本年度の第三回文化財めぐりは、現代の文化財にスポットライトを当て、現在の石巻に直接つながる各種の文化財を見学しました。矢本町の大塩民俗資料館を皮切りに野蒜墓港跡・北上運河・魚市場・青葉神社・石井閘門・旧毛利邸をめぐりました。

昭和三七年（一九六二）に「住居表示に関する法律」が制定されながら、昔からある由緒ある町名が新しい町名に置きかえられるようになり、旧い町名はそこの人々からも忘れられてしまうような状況になりました。石巻市も例外ではありません。町名は、私達の祖先がその土地どのようにかかわってきたかを知る重要な手掛かりであり、かけがえのない文化財です。

今、日本各地では、町名も文化財であるという認識を持ち、住居表示を行わない、あるいは、なるべく旧い町名を生かす、さらに失われつつある町名を記録のなかでだけでも保存するなど、何等かの方法で町名を遺す運動が起きたあります。

石巻市教育委員会では、すでに使われなくなつた由緒ある町名を後世に伝えるため、旧い町名とその由来を石に刻んでその地区に建立する事業を昭和五六年度から行って昭和六三年度までに七本を設置いたしました。本年度は、「裏町」と「小野寺横丁」の2本を設置し、これで設置計一九本になりました。

設置にご協力いただいた方々に厚くお礼申し上げます。

昭和三七年（一九六二）に「住居表示に関する法律」が制定されながら、昔からある由緒ある町名が新しい町名に置きかえられるようになり、旧い町名はそこの人々からも忘れられてしまうような状況になりました。石巻市も例外ではありません。町名は、私達の祖先がその土地と

形成の基盤づくりに貢献、文政五年（一八二三）に死去した仙台藩士小野寺六郎太夫藤原徳雅の姓にちなんだ町名と伝えられている。「牡鹿大肝煎河部守兵治書留帳」の中、「地附留ノニ」に、「小野寺六郎太夫様 但小野寺六郎平様御嬢子にて大番組御士に御座候」と記す寛政七年（一七九五）五月十四日の報告書が残る。

## 旧町名表示石柱設置事業 由緒ある町名を後世に 一町名は文化財

### 小野寺横丁



まるみ製服店前  
▲裏町



▲小野寺横丁  
梅屋分店前



## 文化財標柱・説明板設置事業

ここは遺跡です

工事を計画したら  
すぐ相談を

木製の白い標柱か黒地に白文字の説明

板に「〇〇跡」あるいは「〇〇遺跡」などと記されたものを見たことがある方もいらっしゃると思います。遺跡は意外と私達の身近なところにもあります。

石巻市教育委員会では、「こうした遺跡があることをみなさんにお知らせするため」と聞いている場所で工事（住宅建設、水路の取付、道路工事など）を計画したら、できるだけ早く当教育委員会へ相談し、その指示をうけてください。

とくに周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されている土地では、文化財保護法にもとづく届出が必要となります。遺跡のあるからといって決して工事ができなくないというわけではありませんので、恐れずに、できるだけ早いうちに相談してください。

本年度は標柱を五本、説明板を一基設置しました。設置にあたってご協力をいだいた関係各位にお礼申上げます。

### 【説明板】

#### 石巻城跡

#### 【説明板】

#### 吉井山遺跡

#### 【説明板】

#### 明神山遺跡

#### 【説明板】

#### 中世城跡

#### 【説明板】

#### 新山崎遺跡

#### 【説明板】

#### 越田台遺跡

#### 【説明板】

#### 並東古墳

#### 【説明板】

#### 中世城館

#### 【説明板】

#### 中世城跡

#### 【説明板】

### 【標柱】

#### 清水尻遺跡

沖積平野の微高地にある八世紀後半の墨書きが施された須恵器などが出土した遺跡で、石巻地方の古代を知るうえで貴重な遺跡である。



石巻城跡説明板

## 石巻市文化財だより(第19号)

平成2年3月30日 印刷  
平成2年3月31日 発行

発行: 石巻市教育委員会  
石巻市日和が丘一丁目1番1号  
電話 (0225) 95-1111 内線345

印刷: 株式会社 鈴木印 刷前121  
石巻市蛇谷新田121  
電話 (0225) 22-4101